

子育てにみるアメリカ人の理想

～しつけや日常生活からみた日米の比較～

広島大学附属東雲中学校 小嶋祐何郎
岡山大学附属中学校 今福 茂樹
広島市立亀山中学校 東岡 理恵

1. 研究テーマ

子育てにみるアメリカ人の理想

～しつけや日常生活からみた日米の比較から～

2. 研究の視点

異文化理解にとって大切なことは、世界の様々な文化を等価値的に眺めようとする姿勢である。異なる自然条件や歴史的発展過程を持つ社会が、異なる生活様式を有するのは当然のことである。しかし、自然条件は単に生活様式にとどまらず、そこに住む人々の考え方や倫理観にも影響を与えていくことも疑いない事実である。そしてそのことを私たちは、「家族」というものを手がかりに考察しようと試みた。

私たちは、しつけや親子関係は、その社会がどのような価値を大切にしているかということに深く関わるのではないかという仮説をたてた。そのために私たちは、アメリカと日本の社会を下の表のようにパターン化し、それぞれの社会の持つ価値が、どのように家族生活に影響を与えているか検証した。

		人工的国家 アメリカ	伝統的国家 日本
社会（国家）の成立		・目的意識を持った移民 ・国家・社会の目標が明確	・自然発生的に
文	歴史的に	・伝統的文化の存在しない社会	・幾層にも重なる伝統的文化の多重構造

化	民族的に	・多民族複合文化型社会	・単一民族単一文化型社会
	過去や未来に対する考え方	・未来思考型	・過去（伝統）尊重型
	親子関係	・親子の 支配—服従関係はごくわずかである。	・親子の 支配—服従関係は強い

もちろん、アメリカは多くの点で複合国家である。人種、民族、宗教等、どの社会を取り上げても、それが今日のアメリカの家族を、完全に代表することにはならない。そのことが日本とは違っている点である。日本では、例えば都市生活者や、農村や漁村の家族を取り上げても、程度の差こそあれ、「日本人の家族」という点では、どこを取り上げても、それほどの違いはない。しかし私たちは、次のように考える。

アメリカの社会は、その多様性のゆえに、未来に向かって「統一」を求めようとしているのではないのかと。

私たち日本人は、ふだん日本の国内で生活しているかぎり、「国家」というものを意識して生活することは、ほとんどないといえる。私たちは、自分が日本国民の一人であるとか、地域社会の重要な構成員の一人であるとは、アメリカ人に比べて、それほど意識していないのである。まして、たいていの日本人は、多くのアメリカ人のように、宗教を重視した生活を送ってはいない。

つまり、日本はその歴史的発展過程のゆえに、伝統的価値に基づく親子関係やしつけがなされているのに対して、アメリカでは、どんな国家や社会を作り、そして、どんなアメリカ人として生きていくかが大切にされ、そのための親子関係が形成されているのではないのかと考えたのである。

3 日本の中学生に対するアンケート結果について

事前に、日本の3つの中学校（広島大学附属東雲中学校，広島市立亀山中学校，岡山大学教育学部附属中学校）の生徒計116名にアンケートをとった。アンケート項目は下記のとおりである。

- 1) あなたの年齢は
- 2) あなたの性別は
- 3) 何人家族ですか
- 4) 兄弟姉妹はいますか
- 5) 人生についてもっとも大事なことは
a 仕事 b 趣味 c 家族 d 社会や国家への貢献
- 6) 週に何回ぐらい家族で夕食をとりますか
a ほとんど毎日 b 3～4回 c 1～2回 d ほとんどない
- 7) 食事の準備や片付けを手伝いますか
a ほとんど毎日 b 順番の時 c いわれたとき d ほとんどしない
- 8) 家の中で仕事がありますか
a はい b いいえ
- 9) その仕事にたいして報酬をもらいますか
a はい b ときどき c いいえ
- 10) あなたの服は誰が選びますか
a 親 b 自分 c 親と一緒にだが自分で決める
- 11) あなたの服は誰が片づけますか
a いつも自分 b 時々は自分で時々は親 c いつも親
- 12) あなたはおこづかいをもらっていますか
a はい b いいえ
- 13) あなたは悩みを誰に相談しますか
a 父 b 母 c 兄弟姉妹 d 友人 e 先生 d その他
- 14) 自分の部屋をいつもらいましたか
a 小学校入学前 b 小学校1～3年 c 小学校4～6年

d 中学校入学後 e まだ

15)自分の部屋の掃除は自分でしますか。

a いつもする b ときどき c ほとんどしない

16)いつ頃から自分でおきるようになりました

a 小学校入学前 b 小学校1～3年 c 小学校4～6年

d 中学校入学後 e まだときどきおこしてもらっている

17)あなたの両親は子供を残して夜外出しますか

a よく b ときどき c まれ d ない

18)校外で何か活動していますか

a スポーツ b 芸術文化活動 c ボランティア活動 d 塾

e いいえ

このアンケート結果の中で特徴的なものをみると、5)ではグラフ①のように、c 家族、b 趣味の割合が高く、e 国家・社会への貢献の割合が低いことがあげられる。これは、社会の一員としての意識よりも、個人の生活をより重視していることをあらわしているといえよう。

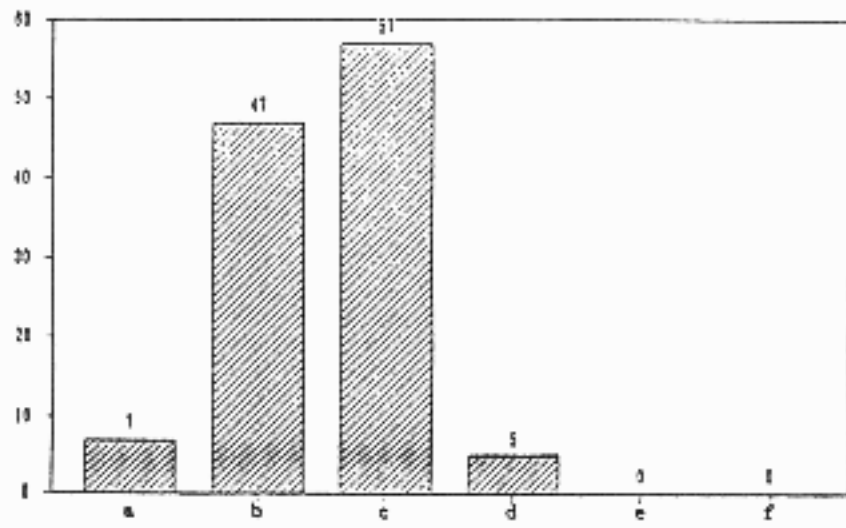
また8)では、いいえと答えた生徒が52人おり、さらに9)ではグラフ②のように手伝いによって報酬を得ていない生徒のほうが多い。これは、日本の家庭では手伝いに関係なく小遣いを子供に与えているからであろう。12)によれば99人が小遣いをもらっている。

中学生の生徒は14)の結果からみると116人中112人が自分の部屋をもっているが、16)でみるとグラフ③のように、かなりの生徒がまだ朝おこしてもらっていることがわかる。このあたりに、子供の自立という面で重要なポイントがあるのではないか。

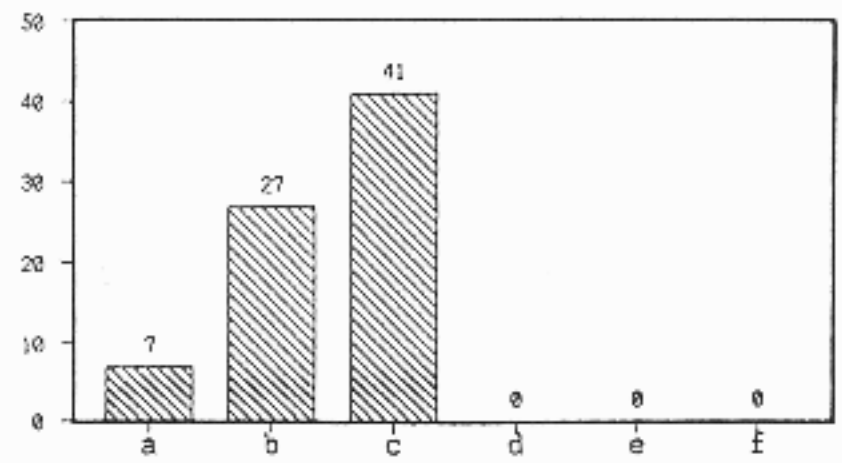
グラフ④は17)の結果である。アメリカの家庭ではよく子供を残して両親だけで、夜外出するといわれるが、このアンケートの結果は対照的であるといえるだろう。

グラフ⑤は18)の結果である。予想されたとおり、半数以上の生徒が塾に通っている。親が子供に何を望んでいるかがよく表れていると思われる。

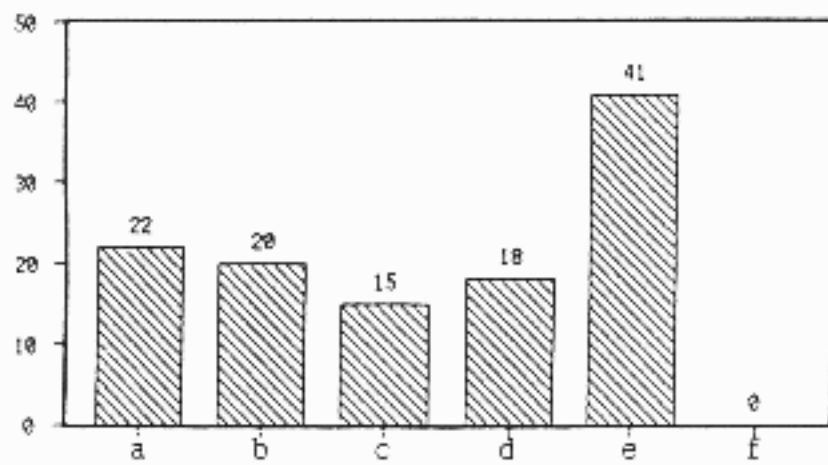
グラフ①



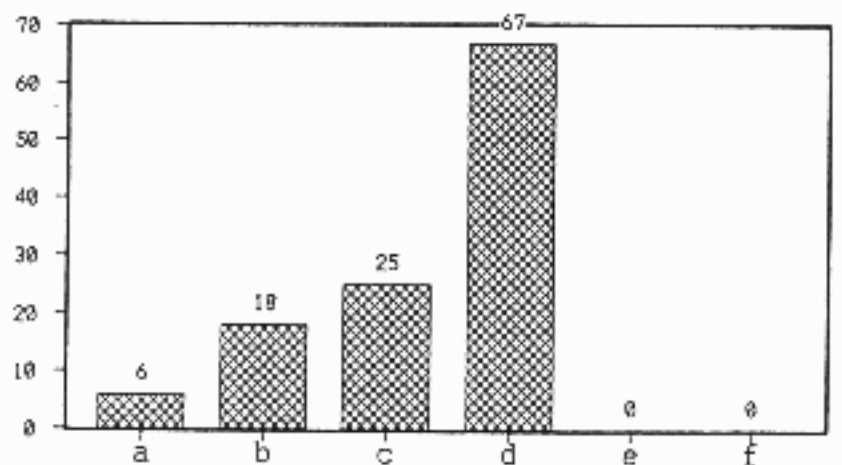
グラフ②



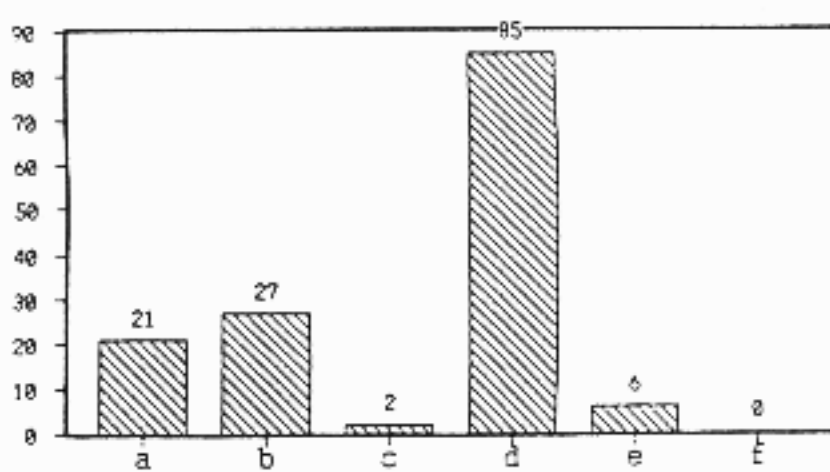
グラフ③



グラフ④



グラフ⑤



4. アメリカでの調査

1. スノーヒル小学校での親子に対するインタビュー

グリーンカウンティ内の2つの小学校のひとつ。在籍生徒846名（1993年）。今回の調査にあたって我々のパートナーを勤めていただいた本校教員キャメローンさんが、自分のクラスの生徒たちに呼びかけて持たれた。4年生を中心にその兄弟（うち2人は中学生）を含めて12人とその親にインタビューした。

今回のインタビューは、日米におけるそれぞれの家庭生活のあり方を知るため、事前に日本でおこなった中学生へのインタビューとほぼ同じ質問がなされた。

その中で注目すべき点を挙げてみる。まず、「親からおこづかいをもらっているか」という問いに対して子供は「もらっているが、自分の決められた仕事をしなければゼロあるいはおこづかいが減る。」と答えている。自分の家庭内での仕事として、「自分の部屋の掃除、バスルームの掃除、犬小屋の掃除、皿洗い、車洗い、服の片付け、アイロンかけ、料理」を挙げた。次に親に対して、そのような雑用を子供に与える理由を求めると、「家族の一員としての自覚をもたせるため」「責任感を養うため」「自立心を持たせるため」という答えが返ってきた。「何かをやったことやろうとしたことへの報酬」という答えや「何かを学ばせるため—例えばお金の使い方、価値観」もあった。

次に「朝ひとりで起きることができるか」の問いに、7才の男の子は「はい」と答え「3～4才の頃から」その習慣ができたといい、「早目に起きたら卵を焼いたりし、時間がなければシリアルを準備する」と説明した。

親はどのような価値観を子供に求めているのかを探るため、まず子供に「親からよく言われる言葉」をたずねてみた。その中に「全力を尽くしてがんばりなさい」という答えが見られた。親にそういう理由を尋ねると、「自分自身が親からそのように言われてきたし、子供自身に個人差があるので、たとえ結果が完璧ではなくともベストを尽くせば素晴らしいと思うから」という説明を受けた。

最後に「生きていく上で大切にしていきたいことは何か」と聞いた答えのなかに「家族、友達」に混じって、「キリスト」「キリストとの良い関係を作ること」「教会へいき、聖書を読むこと」という答えがかならず聞かれた。親への、「子供たちにどんな人間像を期待するか」についても、「精神的に強い人、責任感のある人」というこたえとともに「神を大切にし、良きキリスト教徒であることが社会生活のなかでもとになるこ

と」だと考える親の意見に多く接した。子供たちの課外活動のなかに、「乗馬、水泳、バレエ、ピアノ、絵画」などにまじって、「ボランティアチャーチグループ（フレンドシップシーカーズと呼ばれる）への参加」という答えが聞かれたこともこのことに関連があらう。

2. スノーヒル小学校長のインタビュー

ゲイル＝T＝エドモンドソンさんは、1992年より同校の校長を勤めている。以前は、一数学教師として勤務、ホームコーディネーター（後述）、小中学校の副校長を経験するなど、1973年よりグリーンカウンティの教育制度に携わって現在に至る。たばこを主作物とする農場経営者のご主人とのあいだに子供を3人お持ちである。

「様々な問題をかかえる家庭（経済的貧困、麻薬・アルコール中毒、移民など）に対する対応」は、日本とは異なった方法でおこなわれる。直接かれらに接触するスペシャリストの育成である。これは「ホームディネーター」と呼ばれ、直接その問題家族内の親と接するための訓練を受けた人々をかかえることである。教師それ自体は、学校内で子供を教育していくために資質向上のため各種の研修を積む。たとえば、大学教授などの専門家を学校現場に招いて講義を持つこともそのひとつである。

「理想の家庭像」についてお聞きした。彼女は、それぞれの経験に基づいてひとりひとりが理想のアメリカ的家庭像を抱いていると言う。それを彼女は家族というレベルではなくむしろ個々の人間性の問題として扱った上で、「神とともに生きる人」「積極的に社会に貢献する人」になることであると言う。「アメリカの教育はミッションに基づいて始まり、それは民主主義を作り出すためであったことを忘れてはならない。」といい、「親は家庭において、子供にとっては生涯教師だ。」と付け加えた。

3. 法律事務所、裁判所、拘置所の見学及び地方弁護士へのインタビュー

カレン＝クラッチフィールドさんは、ご主人とともに弁護士事務所を開設している。小学生2人の母親でもある。主としてご主人が刑事訴訟を、ご本人が民事訴訟を担当されている。裁判制度（陪審員制についてなど）や現代の犯罪状況などをお聞きし、拘置所の見学を許可された。

特に、家庭問題から引き起こされる青少年犯罪について詳しくお話をうかがった。

18才未満の犯罪については、成人犯罪とは違う特別なシステムが存在する。その中でも「親によって不当な扱いを受けている子供（放任、暴力、性的虐待など）」にたいしては、青少年社会福祉事業を設け、問題解決のための調査を行っている。これらの問題は、件数としては増加の一途をたどっているにもかかわらず、重大な社会現象だととらえられていないところに大きな問題がある。しかも、非公開のため、親の非を証明する確固とした証拠を入手するまで決断ができないために、子供を救うことができずその成長過程に著しいダメージを残すことが少なくないという深刻な問題もある。

手続きとしては、①訴訟の提起 ②保護者の召喚 ③裁判所の決定 が行われる。その間、親には子供との関係の改善を働きかけたり、子供を「フォースターホーム」と呼ばれる一時的な収容所へ保護することもある。親元へ帰るのが困難と見なされた場合、子供を永遠に生みの親から離して「養子縁組み」をせざるをえない。がこの場合も乳幼児ならまだしも、ティーンエイジャーの里親はなかなか見つけにくい。何故なら、乳幼児の場合、親と子のどちらに非があるかは明らかであるが、ティーンエイジャーの場合問題が複雑化しており、親が一方的に悪いとはいえない場合が多いからである。

子供を育てることに努力しない親が増えてきており、家庭問題は増加している。共働きの理由を子供たちに話し、理解させることがないために家庭内の人間関係が悪くなるのも一例だ。現象としては、10代の妊娠、麻薬中毒、アルコール中毒が現れている。

5. 考察

この研究のために、私たちは、はじめに日本の子どもたちの実態調査を実施した。この調査でわかったことは、まず、日本の子どもたちは、14, 5歳になってもまだ自立していないということである。例えば、朝、自分で起きることができない（親に起こしてもらう）子どもが40%もいる。同様に、自分の洋服の整頓や、部屋の掃除をしばしば（男の子については、かなりの場合）親にしてもらっている。まして自分の衣服の洗濯など、ほとんどしていないのが実情である。そして、そのことを少しも恥ずかしいこととは思っていないのである。また日本の親も、文句を言いながらも、自分の子どもの世話を細かくしてやることを、むしろ当然のこととして受けとめているのである。

私たちのメンバーの一人は、ある黒人の家庭にホームステイした。その家族の14歳の娘は、夏休みの間中、近くの家の子の世話をすることを仕事にしていた。もちろん、それに対する報酬を受け取るのであるが、そのようなことは、アメリカでは、一般的なことであるが、日本ではまれである。彼女はこう言う。「私が世話をしている女の子は、私にとっては妹と同じような存在だ。でもこれは、私の仕事だ。」そう、彼女は、その女の子の世話を、親切ではなくて、仕事として行っているのである。

スノーヒルの小学生に聞いたところでも、ほとんどの子どもたちが、家庭で自分の役割を持ち、それに対する報酬を与えられている。親たちは言う。「これは、社会に出て収入を得るための準備なのです。」アメリカ人にとって、家族とは、まさしく小さな社会なのである。アメリカ人は、家庭で、家族との関わりの中で、社会人として、そして良きアメリカ人として生きていくための準備をしているのである。一方日本では、子どもは家族の中での役割に対する報酬はほとんど与えられていないのが一般的である。なぜなら、それは、「仕事」ではなく「しつけ」として受け止められているからである。

日本の子どもたちに、親からよく言われる言葉について聞いてみた。その結果、日本の子どもたちは、親から、「礼儀正しくしなさい」とか、「人に迷惑をかけてはいけません」「出しゃばらないようにしなさい」等とよく言われているようである。もちろん、「勉強しなさい」が、一番よく言われる言葉であることは言うまでもないことであるが……。

私たち日本人にとって、人前では、あまり出しゃばらず礼儀正しく、協調性を保つことが何よりもとめられる。何百年も島国として、他からの文化の影響を断続的には受けながらも、独自の文化を育ててきた日本人は、人と違っていることや、行き過ぎた強調を何よ

り嫌う。長い間、単一民族、単一文化（もちろん完全な単一という意味ではなく、相対的な意味で）で過ごしてきたことによって、私たちは、よけいなことをしなくても、言わなくても、すべてわかっているという前提の中で生きてきた。素材をそのまま生かそうとする「刺身」や「折り紙」等はそうした文化の典型例である。日本人にとって、まず大切なのは、自立心や独立の気風より、強調性や「まじめ」に生きることなのである。

それにたいして、アメリカの子どもたちは、「ベストをつくせ」とか「自分のやりたいことをやりなさい」等と言われている。その理由を親に尋ねると、「自立のため」「自分の人生に対する責任を持たせるため」等という言葉がかえってくる。アメリカ人にとって、「自立」とは、家庭生活における、極めて重要な事柄なのではないかと考えられる。

私たちは、ホームステイ先において、しばしば、子どもに対する両親の接する態度について、注目すべき光景に出くわした。アメリカの食卓では、主役は子どもたちであり、親は聞き役である。もちろん親は、子どもに、人生にとって大切なこと（例えば、教会の教え）等を教育しているが、私たち日本人にとっては、良き相談相手としての親の役割を強く感じる事ができた。

一方、日本ではどうであろうか。先述したように、親に対する子の依存度は極めて強いにもかかわらず、困ったときに親に相談しようとする子どもはまれである。（父親＝4％，母親＝13％）

日本の家族では、伝統的に親（とくに父親）は、権威者としての役割を求められてきた。と同時に、親は、子供に対して全ての犠牲を払う。日本の親は、子どもを別個の人格としてではなく、むしろ自分の分身として考えている傾向がうかがえる。日本の社会でしばしば発生する「心中」などは、その典型例であろう。

子どもが成人に達するまで、日本の親子関係は、極めて強い相互依存関係が続いていく。そして、子どもが成人に達しても、依然として親にとって子どもは「微力な存在」であり、子どもは「家」という形式からなかなか離れることができないのである。

もう一つ、アメリカと日本の家庭生活における大きな違いは「教会」の存在である。スノーヒルの小学生の多くが、「日常生活の中で最も大切なことは何ですか」という問いかけに対して「教会」「教会に言って聖書を読むこと」と答えている。スノーヒルの小学校の校長先生も、「理想的アメリカ人とはどのようなものか」という問いかけに対して次のように答えている。「社会的貢献ができ、奉仕活動を大切に人、民主社会を作っていくように人、それに教会での生活を大切に人です。」このことが、日本とは大きく

異なった点であり、そしてこのことが、アメリカにおけるボランティア活動の重要視や、弱者に対する意識に反映しているのではないかとと思われる。

私たちは、グリーンカウンティでのいくつかのインタビューにおいて、今日のアメリカ社会が抱える様々な問題を知ることができた。それは、離婚の増加であったり、10代の妊娠、出産であったり、貧困やドラッグ、アル中による子どもに対する虐待などである。こうした事態に対する対応策として、例えば、法律上の取組みとして、テンポラリー・ホームの存在や、養子制度などがある。しかし、10代の子どもを養子として迎えることの困難な状況も知ることができた。

また、学校においては、教員の資質向上のために、専門のスタッフを置くことや、ホーム・スクール・コーディネーターの役割等についても知ることができた。同時にアメリカの教師が、いかにこの問題に直面し、悩み、努力しているかについても理解できた。このことは、今回の私たちの調査における大変大きな収穫である。そしてこのことは、多かれ少なかれ、近いうちに私たち自身の問題となるであろう事が多いに予想できる。

アメリカは、これまですべてを受け入れてきた。そしてこうした困難な状況にもかかわらず、引き続きすべてを受け入れようとしている。そしてこのことが、まさしく、私たちが最初に述べた、多様なアメリカそのものの姿である。そして、アメリカは、建国以来そのことを大切にし、多様性の中の統一を求めてきたのである。

では、日本はどうであろうか。日本の歴史や社会は、多様性とは無縁である。それ故に、日本の今日の状況（多くの外国人労働者とその家族の流入）に、日本の社会は対応しきれないでいる。学校も同じである。今日、日本の学校は、急激な国際化を余儀なくされている。しかし、制度も教員の体制も、まったく整っていない。にもかかわらず、事態はますます進行し、深刻化してきている。私たち日本人にとって、アメリカは、5年後、10年後の自分達自身なのである。だからこそ、私たちは、今日のアメリカの状況を細かく調査、分析し、多くの点で、アメリカの現状に学ぶべきなのである。

異文化理解は価値葛藤の過程でもある。今日の日本は、多くの点でアメリカの影響を受けているにもかかわらず、今回の調査で、私たちは、常に価値葛藤してきた。そして、何より大切なことは、今回の私たちの経験＝価値葛藤を、日本の子どもたちに追体験させることであると思われる。それと同時に、アメリカの子どもたちも、同じように、日本の社会の中で、自分たちの体で、日本という異文化を理解していくことが、何より求められることであると考えられる。

今回の調査における私たちの良き協力者である、K. F. C a m e r o n は、私たちにこんなことを話してくれた。「大切なことは、違いを知ることではなく、共通点を見つけることです。」私たちは、この言葉を決して忘れないであろう。

現地調査及びワークショップの日程とその主な内容

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 1			
10:30	聖ピーター教会	礼拝にやってきた家族にインタビュー	
13:00	エルムストリートパーク	公園でピクニック ECUのメンバーや市長等と歓談 日曜の午後を公園ですごしている 子供連れの家族にインタビューや 写真撮影など	
15:00	ロデオ会場	ロデオ見物に来ていた家族のVTR 撮影	
16:00	ヒルトン・イン	現地在住の日系人にインタビュー (夫が米軍軍人) 戦後、日本で結婚し夫の帰還にとも なってアメリカに移住した女性。 淡々と自分の人生について語ってく れた。	やよい・マク ガイア
19:00	公園の野外ステージ	カウボーイバンドの野外演奏会 各自敷物や飲食物持参のラフな演奏 会であった。日本のサマーフェステ ィバルの会場のような感じではある が夜店などはない。	

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 2			
9:00	ヒルトン・イン	調査内容についてのプレゼンテーション	
13:00	グリーン郡内を視察	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒人教会 ・ 墓地 ・ 新聞社 ・ たばこ乾燥場 ・ 米英戦争の戦場跡 ・ クリーク <p>名のとおり緑の多いグリーン郡内のドライブであった。ただし、「グリーン」の由来は人名であるようだ。このあたりは、たばこ栽培が重要な産業であるので、乾燥場を見学したが、労働者は白人の姿はなく黒人やヒスパニックばかりであった。</p>	ハジンス教授 キャメロン教諭

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 3 9:45	グリーン郡役所	ノースカロライナとグリーン郡についての説明 グリーン郡の教育について説明 教員の資質向上の方法についての説明	ジェームス・マックロウ ポール・ブロウニング ゲイル・エドモンソン
13:00	スノーヒル小学校	児童・生徒（10人）と保護者（5人）にインタビュー ・手伝い ・人生にとって大切なものは ・校外での活動 ・家庭での教育 信仰心とか社会への貢献を重視する親の考え方は、日本の場合とずいぶん異なるのではないか。 写真を見てグリーン郡の子どもの生活についての話	

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 4 9:00	グリーン郡裁判所	少年にかかわる裁判などについてインタビュー 経済的な問題や10台の妊娠, ドラッグ等によって家庭のバランスが崩れ, 子どもを育てることができなくなった家族が多いということ。	カレン・クラッチフィールド (法律家)
11:30	エドモンソン夫人宅	インタビュー ・問題生徒の家庭的要因 ・問題生徒に対する学校でのかかわり方	エドモンソン スノーヒル小 学校校長
13:30	スノーヒル内を散歩	・理想的なアメリカ人とは ・サニタリー会社 ・測量事務所 ・農機具店	
15:00	スノーヒル小学校	キャメロン教諭のスライドによるプレゼンテーション 日米文化の帰納法的教授について	

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 9 9:00	ミネアポリス, セン ト, ボールの視察	ミネソタ大学 教会 州議会 モール・オブ・アメリカ	

地域の人々の生活

広島大学附属高等学校	田中 泉
米子市立尚徳中学校	根平雄一郎
岡山県立朝日高等学校	鷹家 秀史

1. ティームの参加者

日本側：田中 泉（チーフ）	イーストカロライナ大学側：ベティ・リヴィー博士	
鷹家 秀史	（E C U）	チャールズ・コブル博士
根平 雄一郎		（教育学部長）

2. ティームのテーマ

「地域の人々の生活」

3. 教材開発の対象

「グリーンヴィル市におけるヴォランティア活動」

4. 現地調査のねらいと方法

今回のプロジェクトにおいて、我われチームDに与えられたアメリカ合衆国を理解するための教材開発を行うテーマは「地域の人々の生活」であった。我われは、このテーマにおける教材開発の対象として「グリーンヴィル市におけるヴォランティア活動」を選んだ。それは、アメリカ合衆国において、独特の歴史的・宗教的環境の中で発達していたヴォランティア活動が、現在、崩壊しつつあるといわれる地域社会の中で人々を結び付ける機能を持ち始めている、と推測したからである。そこで、我われは、イーストカロライナ大学（E C U）の協力を得て、ノースカロライナ州グリーンヴィル市において現地調査を行い、地域社会においてヴォランティアがどのように組織されているか、またヴォランティア活動が地域社会をより緊密にするためにどのような役割を果たしているかを解明しようとした。具体的には、アルツハイマー症の老人のデイケア施設、放課後や長期休暇に児童・生徒を預かるデイケア施設、重病の子供を付き添い看護する家族のための宿泊施設、分譲式の老人ホームなどを訪問し、ヴォランティア活動を統括する人にインタビューして活動

内容を尋ねるとともに、また実際に何ヶ所かの施設では、またヴォランティアに直接会って活動に参加する理由や意義を問うた。

5. テーマについての考察

①日本のヴォランティア活動の現状と問題

近年、日本でも自発的かつ無報酬を原則とするヴォランティア活動を行おうとする人が増えているが、ヴォランティアというとにかく大袈裟に構えがちであり、問題も多い。

例えば、通訳や手話といったある特殊な技術を持つ人がヴォランティア活動への参加を望んだとしても申し出先が分からなかったり、仮に参加できても自分の技術を活かせない場に配置されたり、あるいは自分の能力以上のことを要求されたりする場合が生じる。これは、ヴォランティアを受け入れる側の過大な期待や誤解に原因があるが、両者の接点になるべき組織が発達していないことが一番の要因であろう。また、家族や職場など周囲の理解不足によって参加に支障を来す場合もある。例えば、仕事の忙しい時に長期の休暇をとってヴォランティア活動に参加したときに、それが正当な権利であっても非難を受けることは決して珍しくない。もちろん、ヴォランティア自身に問題があって、活動が善意や自己犠牲の押し付けになることでこれを受け入れる側に精神的に負担を感じさせたりまた十分に能力が伴わないためにかえって迷惑をかけるようなことも起こる。さらにヴォランティアの必要性が声高に叫ばれる反面、国や地方自治体などが半ば強制的に奨励することが増えている。例えば、高校や大学の入学試験においてヴォランティア活動を評価の対象にすることや、平成4年度より実施された第二土曜日に児童生徒だけでなく教員にもヴォランティア活動へ参加することを求めたりしている。

こうした問題は、ヴォランティア活動が日本の社会ではまだほんとうには根付いておらず、自然な形で行えないことに最大の原因があると思われる。

②アメリカにおけるヴォランティア活動の歴史

アメリカ合衆国では、建国より約百年の間、ヨーロッパの各国から白人たちが移住してきて東から西へ領土を拡大していったが、その頃からヴォランティア活動は盛んであった。その理由の1つは”汝の隣人を愛せ”というキリスト教の博愛主義によるものであり、もう1つは広大な原野を開拓する中で自然や先住民と闘うために協力するために必要であったからである。そこでは、民族・言語・宗教の要素を同じくする人々がまとまって居住し、

それぞれのコミュニティーを形成していた。このコミュニティーの最大の機能は相互扶助であり、それは基本的に無報酬であったはずである。つまり、この時点では、ボランティア活動は同じアイデンティティを有する人間どうしが助け合うかたちで行われていたのである。したがって、民族・言語・宗教の異なった要素を持つ人々がコミュニティーにいることはなく、ボランティア活動の対象がコミュニティーの外に広がることはなかった。黒人の存在はその端的な例である。彼らは、奴隷解放宣言後も、白人と同じ地域に住んでいながら民族の相違のためにコミュニティーに受け入れられることはなく、ボランティア活動の対象にはならず、むしろ社会的・経済的には差別されてきた。

しかしその後、2つの大戦を経て、工場労働力や軍事力として黒人の能力や功績が評価されるようになるとともに、キング牧師やマルコムXを指導者とする目覚めた黒人たちによって差別撤廃運動が広がった。とくに1960年代になると、ヴェトナム反戦運動を背景に公民権運動や女性解放運動が興隆して、黒人だけでなく、アジア系の住民や女性の地位が向上して社会に大きな変化が起った。しかしそれは同時に、民族というコミュニティーの基盤の分解にもつながったのである。とりわけ都市では、民族間の混住・混血が進んで”民族のるつぼ”・”民族のサラダボウル”と呼ばれる現象が起こり、かつてのコミュニティーの機能は低下している。

しかし、こうしたコミュニティーの崩壊にもかかわらず、現在もボランティア活動は消滅することではなく、むしろより盛んになっている。それは、民族・宗教・性別による差別が解消された代わりに、人間の個別化が進み、年齢・病気・障害・経済力という要素の相違がかつてより顕著になったことが理由と思われる。アメリカ合衆国ではもともと核家族が基本的であったが、女性の社会進出などに伴って離婚率が増加した結果、社会の最小単位であった家族が分裂し始めた。そして、この家族の分解は、老人や子供や病人を孤独にさせる機会を増やすことになった。つまり、老人や子供、病人、障害者、低所得者などの弱者が社会の中で孤立する傾向が強まったのである。そこで、ボランティア活動は、結果的にこうした孤独な人々を助けることを中心に行われるようになったのである。

③日本のボランティア活動の将来

これに対して、有史以来近代に到るまで、ほぼ一つの民族により共通の文化を継承してきた日本でも、第2次世界大戦後、その様相は変わりつつある。とりわけ、1980年代以降世界の国際交流が活発となり、日本も国際化の時代に入ったとされる。その中で、差別や

一方的な同化の強制を否定し、さまざまな異文化を尊重した上で1つの国際社会を形成しようという声が高まった。たとえば、アジアや南アメリカの国々から労働を目的として多くの人々が入国し、日本人と隣接して生活せざるを得ない状況が生じている。しかし、古来日本人が単一の文化を継承してきたことから生じる排他性の故に、外国人との密接な人間関係を作りあげる手段は未熟である。例えば、公立の小・中学校に入学する外国人労働者の子供が増えているが、かれらのほとんどは日本語の読み書きに不自由であり、また教師が彼らの言語を使用して授業をすることは不可能である。そのため子供たちは、ただ教室に座っているだけになる。こうした状況はただ外国人の子供の場合にとどまらず、国際化の時代のもう一つの象徴である日本人の帰国子女にも当てはまる。

こうした国際化から生じる問題だけでなく、日本では、大都市の過密化と農村の過疎化による地域社会の崩壊が問題とされるようになってきているほか、出生数の低下などの理由で高齢者の孤立化が予想されている。こうした状況の中で、相互協力のための人間関係を作りあげるためには、自然の成り行きと時間の経過に期待するのではなく、積極的なボランティア活動が必要である。ところが、日本の地域社会には、歴史的にボランティア活動を行う伝統は未成熟である。そこで、我われはボランティア活動に長い伝統を持つアメリカ合衆国において、社会の中で種々の面で重要な役割を果たしていると思われるボランティア活動を調査して、将来において日本人が民族、年齢、経済格差、障害などの壁を乗り越えて異質な要素にも共感し共生できる人間性を培える教材を開発できればよいと考えたのである。

6. 現地調査の日程とその主な内容

日 時	場 所	主 な 内 容	協 力 者
8 / 1 11 : 00 ～ 12 : 30	聖ジェームズ・ユナイ テッド・メソジスト教 会 (Saint James Unit- ed Methodist Church, 2000 East Sixth St. at Forest Hill Cir- cle, Greenville)	教会のモーニング・サーヴィスへ参加したあと 教会内を見学し、おびび教会にきていた信者に インタビューした ①ヴォランティアとしてどのような形で教会の 活動に参加しているか ・日曜学校で子供たちに聖書の内容などを教え ている ・ホームレスや貧しい人びとに食べ物などを提 供する活動を手伝っている	バット・キャ ンベル博士 (Pat Cambell, E C U) ジョージ・ハ ーヴェイさん マイク・ボー ドさん (信者 代表)
8 / 2 1 : 30 ～ 2 : 30	ザ・クリエイティヴ・ リビング・センター (The Creative Living Center, 2000 East Si- xth St., Greenville)	施設を見学したあと職員にインタビューした ①どのような施設か ・アルツハイマー症によって障害を持つ老人を 月曜日から金曜日の日中 (7:30～17:30) に 預かり、運動やゲームをさせる ・55歳以上の人ならだれでも利用できるが、家 族が連れて来れない人や障害が重い人は受け 入れられない ・障害を持つ老人を抱える家族に経済的かつ精 神的ゆとりを与えることを目的とする ②どのようにして運営されているか ・ユナイテッド・ウェイ (United Way) という 団体が運営している ・4人の職員と大学生のヴォランティアが働い ている ・利用者の支払う料金と一般からの募金の他、 州政府からの資金援助により維持されている ③ユナイテッド・ウェイとはどんな団体か ・このセンターだけでなくいくつかの福祉施設 を運営している ・主には募金活動により運営資金を得ている ・募金は、寄付したい人が施設を指定して申し 込み、給料から引き落とす形で行われる	メアリー・ホ ールさん (Ms. Mary Hall, the Di- rector)
3 : 00 ～ 4 : 00	ザ・ロナルド・マクダ ーナル・ハウス (The Ronald MacDonald House, 549 Moye Blvd. Greenville)	施設の見学したあと、職員にインタビューした ①どのような施設か ・近くの病院へ重症の子供が入院している家族 のための宿泊施設である ・家族の精神的な急用と経済的負担を軽くする ために設けられた ②どのようにして運営されているか	ステファニー ロバーソン (Ms. Stephe- nie Roberson , Public Re- lation Dire- ctor)

		<ul style="list-style-type: none"> ・ロナルド・マクダーナル社の資金提供により設立された（建物の建設） ・個人や企業の資金援助と現物提供により維持されている ・利用者は料金を必ずしも払わなくともよい ・職員は2人だけで、あとはすべて約40人のボランティアにより運営されている ・ボランティアは18歳以上で、利用者への応対など仕事内容について事前に研修を受ける ③（サリーさんへ）なぜボランティアをしているのか ・時間とお金に余裕なある自分にとって、これが生きがいであり、とても楽しい 	<p>ボランティアのサリーさん（Ms.Sally、推定75歳）</p>
<p>8 / 3 9 : 30 ～ 10 : 30</p>	<p>ワードロップ・エイカ ーズ・プリスクール (Waldrop Acres Pre- school, 100 Tar Road, Winterville)</p>	<p>施設を見学したあと副園長にインタビューした</p> <p>①どのようにして運営されているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・約120名の園児に対して16名の職員が働いている ・年齢別に6クラスあり、安全のために遊び場も分けている ・夏休みや放課後には12歳までの児童も受け入れている ・運営資金の8割は利用者の出費であるが、あとの2割は州・郡の社会福祉費から援助を受けている ・普段は大学生のボランティアも来て手伝っている 	<p>シェリー・アイズリーさん (Ms.Sherry Isley)</p>
<p>10 : 40 ～ 11 : 10</p>	<p>ピット郡ボーイズ&ガ ールズ・クラブ (Boys & Girls Club of Pitt County, Firetower Road Greenville)</p>	<p>ボランティアの少年の案内により施設を見学したあと、彼にインタビューした</p> <p>①どのような施設か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放課後や夏休みなどに、6～18歳の子供たちを預かり、面倒を見る（子供たちのほとんどは両親が共働きか、片親である） ・子供たちには勉強させたり、スポーツをさせたり、夏休みなどには食事も提供する ・子供たちが街中で遊んだり、非行にはしることを防ぐ <p>②どのようにして運営されているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユナイテッド・ウェイによって運営されている施設の1つである ・約三百人の子供たちに対して職員は約12名でボランティアが、毎日6名程度来る ・来ている子供の中にも、ボランティアとして年下の子供の面倒を見ているものもいる 	<p>マイク・ウィルカーソン君 (Mike Wil- kerson, 15歳)</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・施設の建物自体はペプシコーラ社が寄付をし食事は州政府が費用を負担している ③なぜボランティア活動をするのか ・自分自身もこれまで年上の人に面倒を見てもらって来た ・有意義に時間が過ごせるし、人の面倒を見ることは楽しい 	
11:45 ～ 1:00	レストラン・アナベルズ	<p>昼食をとりながら、3人のPTAの役員にボランティア活動の内容と参加する理由をインタビューした</p> <p>①どのような活動をしているのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータなど学校の設備を購入するための募金 ・勉強が遅れている子供や障害を持つ子供の面倒を見ることなど ・教室で先生の仕事の手伝い <p>②なぜ積極的に活動に参加するのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者のために奉仕することが良いことであると子供の頃から教会で教えられて来た ・自分の親もこうした活動をしていたのを見て育った ・子供たちがより良い環境のもとで生活して欲しい ・子供を取り巻く学校や社会の様子を、また子供が何をしているかを知っておきたい ・社会から自分が得たものを、また社会へ還元したい ・活動に参加することは自分自身にも何か得るものがある 	<p>アン・マックスウェルさん (Mrs. Ann Maxwell, 1506 East Fifth St. Greenville)</p> <p>モード・ビショップさん (Mrs. Maude Bishop, 113 North Warren St., Greenville)</p> <p>ジェニファー・ストリックランドさん (Jennifer Strickland, 102 South Warren St. Greenville)</p>
8/4 10:00 ～ 10:30	ジャヴィス・メモリアル・ユナイテッド・メソジスト教会 (Javis Memorial United Methodist Church, 510 South Washington St. Greenville)	<p>教会が行っている慈善活動について牧師さんへインタビューしたあと、内部を見学し、図書室で司書のボランティアをしている女性にもインタビューした</p> <p>①どのような慈善活動をしているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・州・郡政府の社会福祉費から資金を得て、貧しい人たちに住居や食事を提供する ・募金を行って、障害者のために建物に車椅子用のスロープをつける ・家から出ることができない老人や障害者のためにラジオを通じて説教をする ・子供たちのために日曜学校や夏休みの聖書教室を行っている ・外国の災害地に人を派遣する 	<p>シドニー・フギンズ牧師 (Rev. Sidney Huggins)</p> <p>ロイス・パターソンさん (Mrs. Lois Patterson, 推定70歳)</p>

		<p>②なぜヴォランティア活動をしているのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・司書としての自分の知識・経験を活かして、教会や社会に貢献できる ・小さな子供たちと話したり、何かを教えたりすること楽しい 	
11:30 ～ 2:30	<p>サイプレス・グレン・リタイアメント・ホームズ (Cypress Glen Retirement Homes, 100 Hickory St., Greenville)</p>	<p>分譲式の老人ホームにおいて、3人の住人と2人の訪問者と共に昼食をとり、施設を見学したあとそれぞれにインタビューした</p> <p>①なぜ息子や娘たちと離れて暮らしているのか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちとは生活のしかたやリズムが違うので別々に暮らした方が楽である <p>②寂しくはないか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たまに家族が会いに来るので寂しくはない (事実、ホランドさんの姪、メレディ・トンプソンさんが訪問者として来ていた) <p>③生きがいは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去の経験を活かして、ヴォランティア活動に参加すること (ホランドさんはロナルド・マクダーナル・ハウスへヴォランティアとして通っている) ・いろんな活動を通じて知り合った若い人たちと交際すること (もう1人の訪問者は、ブラウンさんの友人の大学生であった) 	<p>ウィルマ・ブラウンさん (Mrs. Wilma Brown)</p> <p>チャリティ・ホランドさん (Ms. Charity Holland)</p> <p>イヴリン・ステュアートさん (Mrs. Evelyn Stewart)</p>
3:00 ～ 4:00	<p>イースタン・カロライナ・ヴォケーショナル・センター (Eastern Carolina Vocational Center, P.O. Box 613, Greenville)</p>	<p>知的障害者のための施設を見学したあと副所長と企画主任へインタビューした</p> <p>①どのような目的の施設か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おもに知的障害者に職業技術と社会的常識を教える ・障害者に働く場を与えて自立させる <p>②どのようにして自立させるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害者一人ひとりに何ができるかを探る (誰でも必ず何か1つはある) ・市場競争力のある製品を生産する技術を身につけさせる ・社会的常識を身につけさせ、就職させる <p>③どのようにして運営されているか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・費用の15%は州政府からの援助であるが、あとは所内で生産した製品の売り上げでまかなわれている ・利益に対しては税金が免除されている <p>④困っていることは何か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術を身につけることは比較的容易であるが社会的常識を身につけることは難しい 	<p>リサ・ワードロスさん (企画主任、Mrs. Lisa Ward-Ross)</p> <p>ボブ・ジョーンズさん (副所長、Mr. Bob Jones)</p>

		・公共交通機関が発達していないので、障害者が一人で通って来ることができない	
8 / 5 2 : 00 ～ 2 : 30	E C U 教育学部内	<p>コミュニティー・スクールズ・コーディネーターにインタビューした</p> <p>①コミュニティー・スクールズ・プログラムとはどんな組織か</p> <ul style="list-style-type: none"> ・放課後や休日に学校の施設を一般の人たちに開放して、レクリエーションや教育的プログラムを実施する ・各学校のPTAのボランティア・コーディネーターと連携をとって、ボランティアをしたい人とできる事柄を調べ、ボランティアを必要とする所へうまく派遣するなど、調整と統括をしている ・ボランティアの能力向上のために、研修を行う <p>②この組織を通じて行われるボランティア活動にはどのようなものがあるか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ、レクリエーション、教育的プログラムの講師 ・勉強が遅れている生徒への学習指導者 ・問題を抱える生徒への精神的指導者 ・学校の図書収集、やコンピュータの購入のための募金 	アリス・キーンさん (Ms. Alice Keene)
8 / 9 9 : 00 ～ 12 : 00	ミネアポリス・セントポール市内 (Minneapolis=St. Paul city area)	<p>エンロー博士夫妻の案内で、ミネソタ大学構内やセントポール大聖堂、ミネソタ州議会議事堂（キャピタル）などを見学した後、昼食と買物をおかねてモール・オヴ・アメリカで各自過ごした。また、この間の移動の車内でエンロー博士に対し、グリーンヴィル市で我々が調査したボランティア活動についての状況がミネソタ州でも同様であるか否かを確認した。その解答として注目すべきは、ミネソタにはコミュニティー・スクールズプログラムが存在しないが、ボランティア活動は同様に活発であるということであった</p>	ウォルター・エンロー博士 (Walter Enloe, Univ. of Minnesota) およびその夫人キティーさん

7. 現地調査によって得られたこと

① ヴォランティア活動を円滑にする組織の存在

ヴォランティアの人材確保については、コミュニティー・スクールズ・プログラムの果たしている役割が大きい。この組織は、ヴォランティアとヴォランティアを必要とする人々を有効的に結び付ける機能を持っており、主に各学校のPTA組織のヴォランティア・コーディネーターと連携して、ヴォランティアを募集し、その能力に応じて配置する一方で、スポーツ大会や講演会などヴォランティアによって実施されるプログラムを企画・運営している。

一方、ヴォランティアを支える資金の確保については、ユナイテッド・ウェイが重要な役割を果たしている。この団体は、郡、州、連邦の各レベルで組織されており、一般からの募金によっていくつもの施設を運営している。今回訪問したクリエイティブ・リビング・センターやボーイズ&ガールズ・クラブもその例である。特徴的なのはその募金方法で、寄付したいと思う人があらかじめ寄付金の配分先を運営されている施設の中から指定できることである。

また、どのようなヴォランティアが必要とされているかを人々に広く知らせるための方法も発達している。それは、新聞やテレビジョンといったマスメディアの利用である。地元の新聞には毎週火曜日の第1面にかなりのスペースを割いてヴォランティアの募集が掲載される。また、テレビジョンでは、ローカル局が文字放送によって毎日決まった時間に数分間の間、地域のヴォランティア募集の情報が放送している。

② ヴォランティア（参加者）の多様性

今回の訪問では、多くの老人が様々な場所でヴォランティアとして活躍しているのに接した。ロナルド・マクダーナルハウスの受付をしていたサリーさんや、ジャーヴィス・メモリアル・ユナイテッド・メソジスト教会の図書室で司書をしていたパターソンさんなどはその典型であろう。また、サイプレス・グレン・リタイアメント・ホームズに住むホランドさんがやはりロナルド・マクダーナルハウスでヴォランティアとして働いているということも印象的であった。

また、PTA活動の一環として母親たちがヴォランティア活動に積極的に参加していることもわかった。彼女たちは、職業を持っていて時間的に余裕はなくても、あるいは離婚していて経済的に余裕がなくても、自分の子供の環境をよくしたり子供を行動について情

報を得るためには、ヴォランティア活動に参加すべきであるという意見を持っていた。

一方、ロナルド・マクドナルドハウスのように、企業が利益を社会に還元するという目的で、資金・現物・人間を提供しているのもヴォランティアの一形態であると言えよう。この場合、当然、宣伝にもなっているが、本来の目的がよければそれを非難しないようである。そのほか、街中に、“ Adopt a way ” という標識が企業名を書いたプレートとあわせて道路脇に立てられていたが、これは企業が社員の中からヴォランティアを募集し、勤務時間外を使ってそれぞれ決められた担当の道路を清掃する制度である。

③ ヴォランティアを行う目的と意義の特徴

どのヴォランティアにインタビューしても必ず口にするのが、「自己の満足と楽しみ」という言葉であった。それは、ヴォランティア活動への参加が自己犠牲的な奉仕ではなく、まず自分にとっての意義、自分の立場を優先させていることを意味する。それも、日本でよくいわれるような、社会や地域、他者に貢献することによる満足感というより、むしろ、自分の知識や技術を発揮できること、いろいろな人と出会い人的なネットワークを作れること、余暇を有効に過せることなどが理由で、自分から弱者に対して何かを一方向的に与えるというのではなく、自分も何か別のものを得るという、ギヴ・アンド・テイクの意識である。また、老人に限らず、ヴォランティアにとって、活動に参加すること自体が、自分も社会の一員としてのアイデンティティーを持つことにつながっている。

一方、何人かのヴォランティアへのインタビューを通じて、「社会へ貢献する」あるいは「社会をよくする」という言葉を何度か聞いた。これは、自分の周囲に住む様々な弱者、すなわち、老人や子供、障害者、低所得者などへの支援を意味している。その根底に、困っている人に奉仕することの大切さを幼い頃から教会で教えられたり、親がヴォランティアに参加していたことで教えられたことによって、ヴォランティアに対する義務的な意識があるのも確かである。そして、そうした義務感が、「自分が社会・地域・他者から得たものを還元するべきである」とか「自分の子孫が生きていく社会・地域をよくするべきである」といった意識へ発展しているようである。

8. 総括

グリーンヴィル市においての調査で一番印象的であったのは、老人がヴォランティアの

主力となっていることと、かれらが一様に活動の楽しさを強調したことであった。老人に限らずボランティアたちは、時間的にも能力的にも自分にできる範囲で活動に参加しており、ともすれば無制限に自分を費やし無理が生じがちな日本のボランティアとの大きな相違である。またボランティア活動を円滑に運営するために、人材と資金をコントロールするシステムが整備されていることも日本との大きな違いである。もちろん、このシステムは、始めから存在していたわけではなく、まず個人レベルの活動があって、次にこれに共感した人々へ活動が広がることによって必然的に組織化され、次第に恒常的なものになったのである。日本では何事も「上から」の組織化による場合が多いが、アメリカに見られるような「下から」の組織化の方が実情に合ったものができるのではないだろうか。

また、実際に訪問してみてよく分かったことだが、一人暮らしをしている人が多い。その大半は、離婚や子供との別居によるものであった。このような家族の構成人数の減少は、弱者が社会において孤立する可能性を大きくしている。したがって、ボランティア活動が果たす役割は以前よりまして重要になっているようである。それは、前述したように、ボランティア活動が、支援を受ける弱者だけでなく、参加するボランティアも含めた人的ネットワークを作っているからである。この人的ネットワークは、以前の時代のコミュニティーに代わるものになりうる。

このように考えると、ボランティア活動は、ボランティア自身も含めて、地域社会の中で孤立しがちな人たちと共感し、共生することをめざして行われ、確実に人びとを結び付けているのではないだろうか。アメリカ人たちはこれを意識しているかどうかは別として、きわめて自然な感情で行っていることがよくわかった。それを表わす言葉として、コミュニティー・スクールのコーディネーターであるアリス・キーンさんが言った「他者への愛と思いやり (Love and concern for others)」が印象に残っている。

9. 反省と課題

「グリーンヴィル市のボランティア活動」というテーマは、日本にいる間は調べることができない対象であり、行ってみないと分からないという面があった。そこで、準備不足と承知しながらも、簡単な質問項目だけを決めて調査にはいることになった。この結果、大きな課題が1つ残った。それは、ボランティアやコーディネーターへのインタビューが中心になったことで、実際の活動が見られなかったことである。インタビューした相手

の人達はみな誠実に答えていただいたが、全体像を把握するまでに時間がかかった。もし、2、3日間でもよいから1人のヴォランティアと一緒に行動できたら、もっといろんな側面を見ることができたのではないかと思う。また、当初、我々は教材作りにVTRを利用する予定であったが、インタビューだけではヴォランティアと銘うった教材には不適切であることが帰国して編集をする段階で分かった。そのインタビューも全くの手探り状態の中で行っていたため、質問内容が稚拙で、帰国してから「なぜあの人にこのことを尋ねなかったのか」といった反省が多かった。

また、もし、再びこのような機会が我われに与えられるならば、アメリカにおけるヴォランティア活動の問題点について解明してみたい。例えば、行政による社会福祉政策はヴォランティア活動を促進するような機能を持っているのか、つまり両者の間にどのような関係があるのかということ、また有色人種の活動に対する差別があるのではないかということである。

今回の現地調査では、ECUの先生方を始めとして多くのアメリカの人達に暖かい歓迎と惜しみない協力を受けたことに感激した。とりわけ、8月2日から5日まで、ずっと我々と行動を共にしていただき、適時、貴重なアドバイスをしていただいた、リヴィー博士にはこころより感謝したいと思う。我々のテーマの結論は、「人的ネットワークの大切さ」であったが、今回の調査を通じてまさにこれを実感できたのは幸いであった。

ノースカロライナ州の農民の生活

広島県立安芸府中高等学校 和田 文雄
山口県徳地町立堀中学校 山本 英明
広島大学学校教育学部 深沢 清治

1 . はじめに

アメリカ合衆国の生活と文化を理解するテーマとして本チームに与えられたテーマは「産業と環境」である。

調査対象地域であるアメリカ合衆国のノースカロライナ州東部のグリーンビルとミネソタ州のミネアポリス周辺地域について「産業と環境」に関する教材内容はいくつか考えられるが、その地域性を考慮し検討した結果、その内容として農業をとりあげるのがもっとも適切であると考えた。

その理由として、世界の農業大国である合衆国においては産業としての農業が重要であること以外に、対象地域が基本的には農業地域であることがあげられる。

加えて、現地調査に基づく合衆国農業の教材化が生徒にとっても必要とされていることがある。すなわち、社会科の授業において合衆国の農業に関しては、概説的で具体性に乏しく、さらにもとすれば統計的な説明が多く、生徒にとってその様子が具体的にイメージできないものとなっている現実を否定できない。さらにその教材化が日本の農業の理解のきっかけとなる点も重要である。

産業としての農業はどんなに科学化や機械化が進展してもその性格上、地形および気候などの自然環境の影響をうけざるをえないという点から、農業は産業と環境を考えるテーマにふさわしいといえる。

調査の方法としては大規模（企業的）農家と小規模農家を訪問し、詳しい聞き取り調査を実施することにし、そのための調査リストの作成した。その項目は農業経営の内容から農村の生活についてまで幅広い内容である。

調査はノースカロライナ州グリーンビルでは2つの企業的農家と小規模農家そしてミネソタ州南部のレッドウッドフォールズで小規模農家を訪問し、実施した。

さらに、農家、農業施設および耕地などの農村の景観をビデオおよびスライドできるだけ詳しく記録することにした。

2 . 現地調査の概要

1 企業的農場

a. タッカー農場

所有者は元銀行家であり、彼はグリーンビルの名士でもある。二千エーカーのうち600エーカーは借地である。この農場で働いている社員は現在23名で、タバコ栽培時期のみ約60名のメキシコ人を臨時にパートタイムとして雇う。彼らの賃金は一時間あたり4.5～

5ドルで法の定める最低賃金に近い。この労働は少し前まではほとんど黒人であった。

栽培作物の主なものは大豆、とうもろこし、タバコ、および穀物（大麦、小麦、オート麦）などである。最大の収入をあげているのはタバコである（65～70%）。

輪作は、たばこ、穀物、大豆およびトウモロコシの組み合わせでおこなっている。

そのほかの作物としてはキュウリがあるが、これは、タバコの種付けから刈り取りまでの間のつなぎの仕事の意味合いがある。また、収益性の高い芝生も少し栽培している。

農作業は最新式の大型農業機械によりおこなわれている。トラクターは大型のものが11台。付属機械としてハロー（耕耘機）・種植機などがある。コンバインもピーナツ用もふくめ5台。トラックは大小あわせ25台ある。タバコの乾燥庫は40を数える。

コンピューター通信により作物市況（シカゴ）や天候情報などに常にアクセスしている技術面でも経営面でも合理化が徹底的に追求されているという印象であった。

b. ダavenport農場

タッカー農場と同規模の2000エーカーの農場であり、うち800エーカーは借地である。

3人の兄弟の共同経営であり、従業員は9人で、タバコ栽培労働力として12人のメキシコを臨時に雇用している。農業経営に関してはタッカー農場と似ているが、この農場は農業用品を中心とした店を経営しており、ドッグフードなどの卸売りもしている。

2 小規模経営農家

a. バーンズ農場

農場主は現在、引退している。所有農地は250エーカーである。1960年代初めまでは契約農業（シェアクロッピング）をしていたが、'63年より農地をすべて貸している。

契約は一年で、タバコは収穫高の25%を、そのほかの作物は45%を受け取る。近所の人には9つの農地を借りている人もいる。自分と同規模農家の場合、専業農家はなく兼業が多い。小規模農家は農業のみではやってゆけない。自分の農地を貸す人は多いが、それを手放す人は少ない。

b. ブーツ農場（ミネソタ州南部）

経営規模はおよそ500エーカーで、この地域としては平均的な酪農家である。

耕作物は春小麦、とうもろこし、大豆およびアルファルファなどである。

現在、50頭の乳牛を飼育し、収入のおよそ70%が生乳によるものである。生乳の加工はやっていない。一日二回、搾乳小屋で搾乳を機械により自動的におこなっている。しぼった乳は自動的にタンクにためられ、常温で冷蔵されている。主として冬の資料としてとして干し草の束を作るが、ひとつ70ポンドの束を1000以上つくること。

奥さんは老人福祉関係の仕事をしている。肥料会社につとめる息子が農作業を手伝う。

3 Carolina Classic Catfish Farm

この養魚場は会社組織による経営で、広さは270エーカー。26の養魚池があり、ひとつの池の大きさは5～18エーカーである。

かつてはごみ箱に捨てられていたなまずが、最近ダイエット食として注目されるようになっていく。Catfishの養殖はミシシッピ川の下流域でさかんであるが、最近、東海岸地域でも養殖がおこなわれるようになった。卵から成魚までを養殖するこの広大な養殖場で働いているのはたったの2人である。

4 Tobacco Warehouse

Tobacco Warehouse とは葉タバコのせりをおこなう市場である。2つのTobacco Warehouseを訪れる。かなり古い建物で天井は低い、小学校の体育館ぐらいの広さがある。大きな布に包まれたタバコの葉が整然と並べられ、黒人の労働者がそれを電気自動車ではこび出す作業をしていた。2つめの Warehouseではちょうどせりの最中であった。せりは歩きながら行われる。せり値を告げる人の話し方が早い。それを10人ほどのタバコ会社のdealerがせりおとしていく。後ろをついて歩く女性がすぐにせり値などをタグに書き込み、タバコの山において行く。メキシコ人労働者が二人一組で布で包む作業をしていた。

5 生活改善情報センター (Cooperative Extention Service)

このセンターは連邦、州および郡の三者により設立された生活改善のための情報提供機関である。農業に関しては農業経営および生産技術に関する専門的な情報を無料で提供している。このセンターの特徴は専門的で科学的な情報提供のために地元の2つの大学と緊密な連携をとっている点にある。

※社会科教育関係者との懇談

中学校の教師（2名・二学年担当）と社会科の授業とくにソーシャルスタディの指導内容と方法について説明を受け、話し合った。こちらでは授業担当教師によるオリジナルな自主編成の教材研究がなされており、非常に示唆に富む、内容のある懇談であった。

いくつかの教材と教科書の提供を受けた。

3. まとめ - 調査の成果 -

限られた時間と場所の制限があるとはいえ、今回の現地調査は我々にとって意義深く内容のあるものであった。

調査地がアメリカの農業に関する教材研究に最適の場所であるといえないにしても、現在のアメリカの農業の具体的な理解のための資料となるものをかなり収集でき、企業的農業と小規模農業に関しても最近の動向についていくつかの新しい知見を得ることもできたし、またいくつかの誤りについてもその認識を正すことができた。

詳しくはメンバー各自が教材作成の過程の中で具体的にまとめるが、冒頭述べたようないくつかの制約により十分なものではないし、安易な一般化は慎まなければならないことはいうまでもない。ただ、調査における聞きもらしや事実関係については今後、現地の協力者との関係によりできるかぎり正確に把握するようにしたい。

当初は農民の生活についても調査する予定であったが、調査時間の不足や合衆国の農業そのものについての事前の理解不足から、深く調査することができなかったことは課題として残されている。

現地調査およびワークショップの日程とその主な内容 (チームE)

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8 / 1			
11:00	聖ジェームズ・メソヂスト教会	「日曜ミサ」に出席。 教会内の施設を見学する	D. ヘンショー
12:00	イーストカロライナ大学のキャンパス見学		D. ヘンショー
15:30	D. ウィルムス教授との話し合い	特に、ノースカロライナ州の農業に関して説明・助言を受けた。	D. ウィルムス
18:15	「サンデー・イン・パークス・コンサート」に出席	カントリーアンドウエスタンミュージックを堪能する。	
8 / 2			
9:00	プレゼンテーション		
13:00	スーパーマーケットの見学	最近、アメリカ各地に立地しているディスカウントショップを見学した。	D. ヘンショー

日 時	場 所	内 容	協 力 者
15:30	ダavenport農場	<p>大規模な企業的農家。</p> <p>事務所から同じ敷地内の自宅まで車で10分かかる。</p> <p>農業用品を扱う店とガソリンスタンドも経営している。</p> <p>作物はタバコ・とうもろこし・ピーナツ・綿花・大豆および小麦である。</p> <p>機械化による大規模経営がすすめられ、作物とくに穀物についてはパソコン通信によりシカゴ市況にアクセスしている。現在、9人の従業員の他12人のメキシコ人の季節労働者を雇う。仕事は忙しく休む暇はほとんどないが、仕事はおもしろく自信もあるというふうであり、農夫というよりも経営者といった感じである。</p>	D. ヘンショー
8 / 3 9:00	カロライナキャットフィッシュファーム	<p>このなまずの養殖場は会社組織による経営で、広さは270 エーカーで26の養魚池がある。かつてはごみ箱に捨てられていたなまずが、最近ダイエット食として注目されるようになっている。</p> <p>卵から成魚までの養殖をするこの広大な養殖場で働いているのはたった2人である。</p>	P. キャンベル T. プレビンス

日 時	場 所	内 容	協 力 者
10:00	生活改善情報センター	このセンターは連邦・州・および郡の三者により設立された生活改善のための情報提供機関である。農業に関しては経営および生産技術に関する専門的な情報を無料で提供している。このセンターの特色は専門的科学的な情報提供のために地元の2つの大学と緊密な連携をとっている点にある。	P. キャンベル M. スミス
13:00	タバコ市場	2つのタバコ市場を訪ねる。いずれもかなり古い木造の建物で天井は低い。小学校の体育館ぐらいの広さがある。最初に訪れた市場ではすでに今日のせりは終わっており、大きな布に包まれたたばこの葉が整然と並べられ、黒人の労働者がそれを電気自動車で運び出す作業をしていた。2つめの市場ではちょうどせりの最中であった。せりは歩きながらおこなわれる。せり値を告げる人の口調が速い。それを10人ほどのディーラーが競り落としてゆく。後ろをついて歩いて行く女性がすぐにせり値などをタグに書き込み、たばこの山に置いてゆく。メキシコ人労働者が二人一組で布で包む作業をしていた。	P. キャンベル D. イーストウッド

日 時	場 所	内 容	協 力 者
14:00	タッカー農場	<p>典型的な企業的農家。2000エーカーのうち600 エーカーは借地である。働いている正社員は23名でタバコ栽培時期のみ約60人のメキシコ人を雇う。栽培作物の主なものは大豆、とうもろこし、タバコおよび穀物で、農作業は最新式の大型農業機械によりおこなわれている。コンピューター通信により穀物市況（シカゴ）や天気情報に常にアクセスしている。技術面でも経営面でも合理化が徹底的に追求されているという印象であった。</p>	<p>P. キャンベル B. ターネッジ</p>
8 / 4 10:00	バーンズ農場	<p>農場主は現在引退している。所有農地は250 エーカーで、1960年代初めまでは契約農業（シェアクロッピング）をしていたが、'63年以降は農地すべてを貸している。借地契約は一年で更新し、タバコは収穫高の25%を、そのほかの作物はその45%を受け取る。</p> <p>小規模農家は農業のみではやってゆけない。小規模農の場合、農地を貸す人がほとんどで、農地を手放す人は少ない。</p>	<p>D. ヘンショー J. B. コーベット</p>

日 時	場 所	内 容	協 力 者
14:30	グリーンビルの中 学校教師との話し 合い	社会科の授業内容と方法について意 見を交わし、いくつかの自主教材を紹 介してもらい、教科書を譲り受けた。	D. ヘンショー P. キャンベル C. ビットマン V. ディクソン J. ベネット
8 / 5	イーストカロラ イナ大学で英文レ ポートの作成		D. ヘンショー
8 / 9 8:00	ブーツ農場	ミネソタ州南部の酪農家を訪ねる。 50頭の乳牛を飼育し、収入の約70%が ミルクによるもの。経営規模は500 エ ーカーとこの辺りでは平均的で、耕作 物としては春小麦以外に、とうもろこ し・大豆およびアルファルファといっ た飼料作物に特色がある。奥さんは福 祉関係の仕事に従事し、近所に住む会 社員の息子が農作業を手伝う。	D. エリクソン